

不惑からの再出発 ——旅行誌を創刊する——

乾 淳 子

やや遅めに子供三人をもうけ、ふと気が付けば、三重県の片田舎に住んでいました。

ここは、ディーゼルカーが一時間に一本コトコトと走る参宮線沿い。かつては“お陰参り”の善男善女が、エージェンタイカ、エージェンタイカと群をなして通ったという参宮街道の宿場町。そして今は、名物“伊勢たくわん”の原料畑が広々と周囲をとり囲む伊勢市郊外の小さな町です。

二年前、政府は都市災害からわが一家を護ってやろうとお慈悲をたれてか、東京にあった主人の所属する研究所を、そっくりここへ移転させたのです。

“脱都会”の快感とは別に、もともと旅行好きで“地理”を選んだふしもある私のこと、新しい土地を楽しむことにかけては人後に落ちません。子供達も、アメリカの公立校に放り込まれたキャリアの持ち主だけに、結構、土地っ子とうまくやっているようです。

一年間があつという間に過ぎ、三人の子供達が見事な伊勢弁を口にするようになった頃、私は“仲間”を捜していました。

世は、数年前からタウン誌ブーム。100パーセント若者向けのそれではなく、大人にも充分楽しめる地域誌のようなものが創れたら……と、漠と考えていたのです。

広い世の中、同じようなことを考えている人は、やはり居るものです。強力なパートナーになったのは、私と同じコピーライター出身で、伊勢の町並み保存運動などにも情熱を傾けている三十代になったばかりのN君。大学時代を除いては、ずっと伊勢に住んでいる彼は、各界に知人も多く頼もしいかぎりです。

こうして、編集長はN君、記者は私一人というミニ編集室が誕生しました。

スタートしたからには、後にはひけない。私は折しも“不惑”の再出発、N君は八年間も勤めた

会社をやめて、この雑誌に賭けようというのですから。

先ず、雑誌の性格についてかなりの時間をかけて徹底的に論議しました——ここ伊勢志摩国立公園には、年間1,440万人もの旅行者が訪れる。けれども、旅人とこの土地をむすぶ“誌”はまだない。では、新しい視点に立って発見と感動に満ちた“伊勢志摩の旅”をすすめるユニークな旅行誌を創ろう、という点で意見の一致を見ました。

次は、この企画を受けてくれる印刷会社を見つけること。この件は、鳥羽にある、これもミニの印刷会社の若い社長が大英断を見せてくれて、無事、落着——。

創刊号の編集をしながら、広告をあつめたり、販売ルートを開拓したり…仕事は山ほどあります。まだ影も形もない雑誌に、広告を出してくれ、とか、安い稿料で「書いて下さい」と頼むのは、時に、かなり勇気のいることでした。

創刊からちょうど一年、今、私の手元にあるのは刷り上ったばかりの『伊勢志摩No. 6』(隔月刊)です。

この一年間、いろいろな人、様々なでき事との出会いがありました。焚き火にあたりながら、不思議な話を聞かせてくれた海女さん。リアス式の入江でアコヤ貝から輝く真珠をとり出してくれた養殖場のおやじさん。四百年の暖簾を誇る伊勢の名物餅のご当主。燃えさかる炎の祭に取材を忘れそうだった夕べ。

好奇心旺盛な私にとって、取材は楽しみそのもの。原稿用紙にむかい記事をまとめるのも飽きない作業です。

これで、もう少し本の売れ行きさえ良ければ、言うことなしなのですが。

「地方の時代よ」などと、七名に膨らんだスタッフと語らいつつ、頭の中は次号の企画でいっぱい、この頃です。(11回生)